朝日新聞　1999年(平成11年)11月28日

1999-3

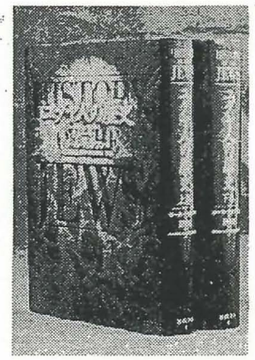
ベストセラー快読

■橋爪大三郎■

四千年を概観する通史

『ユダヤ人の歴史　上・下』

ポール・ジョンソン著



アブラハムから現代まで約四千年の、ユダヤ民族の歴史を概観する。ユダヤ人がまとまって住んでおらず、ユダヤ教に無知なのは先進国で日本だけ。妙な陰謀説の本より、本書をまず読むべきである。

上巻の前半、古代ユダヤ教の部分が鍵である。欧米人と違って聖書、特にモーゼ五書（旧約聖書冒頭の五書）を読みつけない日本人には、とっつきが悪いかもしれない。異民族との紛争やバビロン捕囚の苦しみの中から、ユダヤ教の律法（安息日や食物規制）が成立した。神との契約、預言者、救済などの考え方は、キリスト教、イスラム教にも継承される。日本社会と対極的な世界がそこにある。

続いて、ユダヤ人差別の歴史。イエスを神の子と認めないユダヤ教徒は、キリスト教社会から排除され、高利貸しなどの職業にしかつけなくなる。『ヴェニスの商人』のシャイロックのイメージが出来あがり、たびたび暴力による迫害（ポグロム）を受けた。実際には、識字率が高く、勤勉で、平和な人びとであったのにと著者は嘆く。

本書の焦点。なぜナチスによるユダヤ人のホロコースト（大虐殺）が起きたのか？著者はこの問いに《完全には判然としない》と答える。第一次大戦、大恐慌、共産主義の脅威……原因はいろいろあった。人びとはヒトラーが政権を取っても、昔ながらのユダヤ人差別だと甘くみた。

だが違った。ヒトラーは差別どころか、ユダヤ民族を地上から抹殺することこそ自分の使命だと異常にも信じこんだ。だから戦争をあと回しにしても、ユダヤ人を絶滅収容所に送り続けた。多くのドイツ市民が協力し、黙認した。連合国も気づいたが、特に手を打たなかった。これらの事実が戦後に判明し、キリスト教・西欧世界は、罪の意識に苦しんでいるという。

原著の出版は一九八七年。その後冷戦が終わり、民族紛争が多発した。そしてコソボの「民族浄化」。ナチスの過去を忘れるのは早すぎる。ユダヤ人の歴史は、彼らを迫害した人類の過ちの歴史であることを、苦い思いでかみしめる必要がある。（社会学者）

朝日新聞　1999年(平成11年)7月25日　日曜日

1999-3

ベストセラー快読

橋爪大三郎

戦後の閉塞越えるヒント

『日本の無思想』

加藤　典洋著

戦後日本の思想状況を加藤氏は「裸の王様」にたとえる。裸なのはみえているのに、誰も言葉にしないので、自分だけが間違っていると思いこむ。嘘をまこうけていることを、気づかなくさせるほど深い自己欺瞞が支配しているという。

なぜか。それは、日本の国民が、自分の価値観を根こそぎにされるほど徹底的に敗れたからだ。敗戦のあと、手のひらを返したように民主主義になびいた。アメリカ占領軍が去れば、いやはあの場かぎりと言いつくろった。

ここから、ホンネ／タテマエの区別がうまれる。この二分法は、古くからのものにみえるが、著者はそれがごく新しい、戦後に現れた言い方であることを発見した。口に出さなくても、ホンネはホンネ――言葉を信じないニヒリズムが、思想を不可能にするものの正体だと、著者は看破する。

政治家の失言問題を入り口に、ホンネ／タテマエの区別の起源を追いかけて、本書は、大日本帝国憲法が信教の自由を規定する仕方、古代ギリシャや西欧近代における公共的なもの／私的なものの区分、にさかのぼる。そして、公共的なものを支えるのは、私情（私利私欲）以外でありえないという結論にたどりつく。

『敗戦後論』『可能性としての戦後以後』と、問題作を矢つぎばやに発表している加藤氏が、《いいたいことをそのまま普通の人が読める具合に書いてみ》たのが、本書である。たしかに読みやすい。しかも、内容のほうは妥協なしに、ぎりぎりの厳しい線を追っている。思想の閉塞を乗り越えて進むヒントが、いくつも隠れている。

では、ニヒリズムの診断がついたところで、それをどう克服できるのか。それにはやはり《言葉が力をもつ空間を回復》し、公共的なものの復権をはかることだと、加藤氏は言う。決して新しい提言ではないが、実行するのは容易でない。

「王様は裸だ」と口に出す一人ひとりの勇気が、嘘をつき崩すしかないのだ。

（社会学者）

1999年(平成11年)5月9日　日曜日

朝日新聞

ベストセラー快読

生き方示す明快な「教科書」

橋爪大三郎

『痛快！経済学』

中谷　巌著

ソニー重役就任をめぐる渦中の人、中谷巌・一橋大教授の書き下ろしである。

読者は《中学生以上》とあるとおり、確かに読みやすい。経済学のエッセンスを、数式を使わず、的確に論じてある。高校はもちろん、大学のテキストとして立派に通用する。

マンガが挟まっているからと甘く見てはいけない。本体は活字で、サミュエルソンの『経済学』をかみ砕いた内容と思えばよい。価格法則、有効需要、比較生産費説……基本はしっかりと理解できる。

このように「わかりやすい教科書」なのだが、同時に本書は、明確なメッセージを発している。読者が経済学をよく理解し、賢明な責任ある市民として新たな日本社会を築いてほしいという願いである。

著者によれば、戦後日本はいびつな発展をとげてきた。マーケットの利点が十分に活かされず、不必要な規制や無駄な政府支出が多すぎる。政・官・業の「鉄の三角形」が幅をきかせ、経済のグローバル化に後れをとっている。《自己責任のないところに選択の自由はない。……市場経済は発展しない》ことを、多くの日本人（特に若い読者）が理解し、自分の生き方とすることが、それが、日本再生の本当の出発点になる。

偏差値につられて大学に入ったが、何をやりたいのかわからない。大企業に就職でもしようか。そんな情けない人間になるなと、著者は歯ぎしりしている。まったく同感である。

《「挑戦すること」に拍手を送ろう》とのべる中谷教授自ら、こうした生き方を実践している。細川、小渕内閣のアドバイザーをつとめ、今回は民間企業の取締役に就任が内定。すると人事院から、国立大教授の兼業は認められないと横やりが入った。アメリカなら当たり前のことが、日本では不可能なのだ。

これで話が終わるようなら、日本に未来はない。政府がどこまで自己改革に本気で取り組むつもりか、国民は注目している。

（東工大教授・社会学者）

『痛快！経済学』は

（集英社発売、196ページ・1,700円）

3月10日発売、5刷10万部。編集部に届いたはがきによると、読者は10―80代とかなり幅広い。担当編集者は「経済が複雑化する一方で不況が続き、勉強してみようという気分が盛り上がっているのでは」と話している。

1999年(平成11年)1月24日　日曜日

朝日新聞

ベストセラー快読

「14歳」の心を描く渾身の作

橋爪大三郎

『ゴールドラッシュ』

柳　美里著

神戸の事件に心底から衝撃を受けたという柳美里氏が、十四歳の少年を主人公に渾身（こんしん）のフィクションを書き上げた。舞台は横浜。少年の家庭は裕福だが、母親は離婚同然で不在、姉も高校に通わず遊び歩くなど崩壊している。孤独な少年は、パチンコ店チェーンを経営するワンマンな父親と衝突して、衝動的に殺害。札束を手につかの間の全能感に浸るが、次第に追いつめられ、ついには罪の意識に目覚めるまでが描かれる。

ドストエフスキーの『罪と罰』と展開が似ている。著者の愛読書だそうだが、狂乱のバブル経済や戦後の年輪を刻む裏街を背景に、今の日本を生きる人びとの心の空虚を問いかける小説に生まれ変わった。

作品としての完成度は、いまひとつかもしれない。人物や筋の運びが類型的だし、文体もどこかまとまりがない。にもかかわらず本書が読ませるのは、十四歳の少年が平気で人を殺すなんて、心の中はどうなっているのだろうという人びとの疑問に、正面から答えようとしているからだ。

いくつかの夢の描写が効果的である。地の文がいつの間にか夢のなかに入り込み、少年の恐れや願望や、無意識が渦巻くように展開してゆく。少年なりの論理や感情が、痛ましいほど大人たちに無視され、拒否されていくさまも描かれる。

少年は、突発的な怒りに自らをゆだねるしかない。

こうして浮かびあがるのは、少年が少年なりに家族を再生させようとしていたことだ。少年は、中年ヤクザの金本に父親を、若いお手伝いの響子に母親を求める。しかし二人は、殺人を許さない。少年の自己中心的な世界は揺らぐ。そして苦悩の末、二人と共に生きるには、罪を引き受け自首するしかないと悟るのだ。

《わたしを信じて。なにかを信じなければ生きていけない》と迫る響子に、少年はとうとう《あぁぁ　しんしる　あああ　しんしるよ》と答える。捨て身で時代に立ち向かった著者の営為が到達した、感動的な結末である。

（社会学者）

『ゴールドラッシュ』は

（新潮社、323ページ・1,700円）

11月27日発売、3刷10万部。担当編集者によると、サイン会の参加者も含め年配の男性読者が増えたという。トーハンの〈文芸〉ランキングでは、12月1日調べで7位初登場、翌週2位、以後ベスト10入りを続けている。

おまけ『日経ネットナビ』第5巻第5号 p.209 日経BP社
2000 5.1 発行

橋爪大三郎 東京工業大学教授

理論社会学や、宗教社会学、中国研究などでおなじみの橋爪大三郎氏の大学内にある研究室のページ。最近の活動状況や雑誌や書籍のリスト、大学院授業や学部授業などの紹介ページがある。学部授業のページでは、年度ごとの授業のシラバスやレジュメ、生徒のレポート一覧などを見ることができるので、彼の授業に興味がある人は一読の価値ありだ。最近の活動ページでは、いつ、どういった媒体に、どんな文章を書いているのかをリスト化して掲載。

堤清二氏らとの鼎談を含んだ近著「選択・責任・連帯の教育改革(完全版)」(勁草書房)

橋爪大三郎研究室
➲http://www2.valdes.titech.ac.jp/~hashizm/

朝日新聞 1999年(平成11年)9月19日

＊誤りにつき、訂正します。

ベストセラー快読

■橋爪大三郎■

日本の八〇年代をリードした論者二人の対論集。一九九四―九八年にかけて、混迷する時代と並走しながら雑誌で毎月語り合った記録である。

論壇、文壇、政官財界の裏事情など話題は盛りだくさん。なかでも注目すべきは、田中氏自身がかかわった神戸空港建設反対運動だろう。

＊神戸出身の田中氏は、大震災の被災者にバイクで日用品を届けるなど、独自のボランティア活動を展開してきた。負債をかかえる神戸市が〝市営〟空港の建設を計画すると聞き、氏は敢然と、住民投票条例の制定を求める署名運動に立ち上がる。土建国家日本の矛盾が神戸市に集中して表れていると、浅田氏も賛同。高度成長体質やバブルなど過去のツケを、総決算しなければという両氏の使命感が、本書の基調になっている。

『憂国呆談』
浅田彰・田中康夫著

一味違うポストモダン後

もうひとつ興味深いのは、今年五月に行われた結びの対談。ここで浅田氏は、八〇年代ポストモダンの功罪をふり返る。《ポストモダンなものが知らぬ間にプレモダンなものにつながって、いい意味での相対主義が悪い意味でのなし崩しのあいまいさに転化し》、《「小さな物語」の散乱と交錯……》が、実際はタコツボ的な細分化と自閉に転化した》のが、八〇年代以降の現実だとする。これに対して両氏は、多様性の承認、個人の確立、地方分権などを提案。ポストモダンを経過した、ひと味違ったモダンの手ごたえが感じられる。

最後に本書で気になるのは、同時代の知性への個人批評が厳し過ぎる点だ。八〇年代の《豊かに開かれた空虚》を《生理的に肌で感じて、そこから出発した》という両氏の鋭い感性には、誰しも敬意を払っている。本当に自分が《豊か》なら、同時代の知性にもう少し寛容でもよいのにと、不思議になる。

両氏が体感した《豊かに開かれた空虚》も、戦後社会の歴史的産物だ。それを特権視すれば、世代抗争で終わる。異質な他者、異なる世代を許容し、《多様性を持って開かれた個》のネットワークに日本を再組織することこそ、ポストモダン世代読者の課題だろう。

(社会学者)

田中康夫の過激な1カ月 東京ペログリ日記

YASUO TANAKA　PEROGURI

9月8日（水）

俵屋で朝食の後、「週刊現代」の「新聞私評」、レンタカーを返却の後、伊丹からNH24便で羽田。8月28日に引き続いてまたしても和食にコーヒーのサーヴィス。和食・洋食の別を予め確認した上で飲料の選択を行うべきでは、とチーフパーサーに提言するも、何か不都合が生じまして、と逆に問い質され驚愕。渋谷を徘徊の火星人メイクとも生剝げメイクとも評すべき女子高校生軍団を超えるジャンクな味覚の持ち主が近時、全日空で増殖しているらしい。

原稿終わらず、到着後、夕刻までラウンジ富士で呻吟。一旦、自宅。一新塾なる大前研一氏主宰の勉強会で講義。風邪、悪化。終了後、芦屋は六麓荘に構える邸宅にて成長の三姉妹とアロマフレスカで食事、の予定で向かうも体調優れず。途中退席し、麻布十番で24時間営業の城南薬局。銀座から仕事帰りの女性が脂粉漂わす空間で薬を調合して貰う。

9月9日（木）

夕刻まで睡眠学習。快復の兆しをみせ、M嬢と荻窪の安斎で鰻。空調は利き過ぎなるも極めて秀逸。

9月10日（金）

ひかり137号で名古屋。ひだ13号に乗り換え、岐阜。岐阜新聞主催の講演会。「週刊SPA!」の「一炊の夢」を控室で書く合間に、来訪の中学時代の同級生と再会。名古屋に戻り、全日空の客室乗務員2名とキャンティで食事。紙音なるバー。風邪抜け切らず、大人しくホテルセンチュリーハイアット名古屋に帰館。「BRIO」で連載の「田中康夫が訊く」、田崎真也氏との回のゲラを手直し中に体調、更に悪化。高熱に加えて殆ど声が出なくなる。

9月11日（土）

昼過ぎまで一人でベッド。のぞみ16号で東京。慶應病院の時間外診察を受け、西麻布のたぬきで夕食。

9月12日（日）

体調、依然優れず。終日、ベッド。スペインはバルセロナを経て北東部ロサスの寒村に位置するエル・ブジなる三ツ星料理店へ10月中旬に訪れるべく旅程を組むも、「ギド・ミシュラン」記載の10月15日以前に5カ月間の冬季休業突入、との返答を受け、計画の全面的見直しを行う。北部イタリアのヴェネト、トレンティーノ・アルト・アディジェ両州に点在する二ツ星料理店巡礼で再構築。航空時刻表のOAGに加えて道路地図、「エスプレッソ」「ガンベッロ・ロッソ」等の料理店指南書がベッドに散乱。

9月13日（月）

夕刻、M嬢と六本木の御膳坊で雲南料理。変わらず秀逸。TBSで小島慶子嬢と「アクセス」。

9月14日（火）

夕刻まで原稿。平河町の都市センターホテル。高校時代から僕のファンを任ずる東京ドーム勤務S嬢の要望で、CSG東京地連なる労働組合の女性委員会で講演。終了後、懇親会に出席。再度、慶應病院で時間外診察を受ける。

9月15日（水）

原稿を片付けるべく机に向かうも、結局は旅程作成に終始する。イタリアに加えて訪れる予定のスイスのホテルが軒並み満室。4年に一度開催のテレコム・ジュネーヴが理由と判明。市内はおろか60㎞離れたローザンヌ、90㎞離れたモントレーでも、ホテルのカテゴリーに関係なく満室。自宅で病人食を自炊。

9月16日（木）

夕刻、W嬢と麻布十番に位置する松玄。世上では話題の空間と伝え聞くも、恵比寿の翁で修業とかの蕎麦を理解し得ず。

9月17日（金）

税務処理を担当のM氏、S氏と中野で打ち合わせ。原稿山積で直帰。深夜まで原稿。ON。

9月18日（土）

依然として風邪気味なるも、外資系航空会社勤務のN嬢となか田。パークハイアット東京。PG。

9月19日（日）

浅田彰氏との対談集「憂国呆談」を、長くも「ベストセラー快読」欄で「朝日」読書面が紹介。評者たる橋爪大三郎氏の署名原稿中、田中康夫は「神戸生まれ」、なる箇所を発見。当の本人も頓と把握せざる新事実の「真偽」を照会すべく、ホームページ「asahi.com」にEメールを打つ。本日付東京本社発行版第11面掲載の、「ベストセラー快読」と題する署名原稿中に、看過し得ぬ客観的誤謬が存在するのでは、と憂慮します。担当記者の方から可及的速やかに下記まで御連絡を頂戴致したく思います、との。

池袋のブリックでタイ料理。有楽町のアメリカンファーマシー。自宅で原稿。M嬢に電話するも反応鈍し。聞けば、複数恋愛に花を咲かせる8月15日登場のI嬢から、彼の本命はW嬢よ、と羽田でのラウンジ業務中に吹き込まれたらしく、人間不信だわ、と最後通牒を受ける。好事魔多し、否、身から出た錆。「ベストセラー快読」担当Y嬢より早々に返信。幸か不幸か、小生は「神戸生まれ」ではありません。斯くなる客観的誤謬が何故、紙面上に記載されるに至ったのか、御調査の上、御連絡戴ければ幸甚です、と具体的に誤謬箇所を記して再送。

9月20日（月）

W嬢と矢来町の新潮社でパソコンの権威I氏。彼女の友達が送信のメールにウィルス「Happy99」添付ファイル。知らずに開いたW嬢が直後、僕に送信のメールにも自動添付。発信人が彼女故、ファイル名を確認せぬまま、即座に開封した僕も感染。小まめにノートン・ドクターで診察していた僕のパソコンは程なく〝快復〟するも彼女のパソコンは重症。

TBSの後、六本木に位置するたつの落とし子。三枝成彰氏、石井苗子女史と摩訶不思議な組み合わせ。残念ながら、「噂の真相」に相応しき情報は得られず。朝まで原稿。この日、夕刻に「朝日」Y嬢からメール。曰く、橋爪大三郎氏と連絡は未だ付かざるも、誤認をチェック出来なかった当方のミス故、次回の同じ欄で訂正文を掲載致したく、と。当方、以下の文面のメールを明け方に送信し、ON後、就寝。

メールを拝受しました。如何なる経緯で、斯くなる誤謬が紙面上に生じたのか、先ずは御説明戴ければ、と考えています。誤解無き様、予め申し添えますが、全ての頁を隈無く読了する営為が、書評を行う人物には最低限課せられている、といった旧来的見解には、必ずしも小生は与しません。嘗て「文藝」誌上に於いて2年間に亘って担当致しました文芸時評に、「読まずに語る」なる題名を付けました様に、隈無く読まずとも看破し得る評し手を、文章にて生計を立てる向きは常に心掛けるべきです。其れこそは、小生が繰り返し提唱してきた「勘性」であります。が、他方、小生が神戸出身ではない、にも拘らず、其処に「日本」が集約されている、と考えればこそ、浅田氏も小生も、可成りの頁を「憂国呆談」に於いて割いている訳です。その意味に於いて、小生を神戸出身たればこそ、と記した評し手は、今回の浅田氏との共著の意味を、大本の部分に於いて捉え切れぬ僥、書評という作文を若しや行われたのではあるまいか、との疑念を拭い去れません。その疑念は、拙著(共著)での発言内容は共に「個人攻撃」が過ぎる、と捉える最後段の論旨展開に於いても窺えはしますまいか。無論、この点は「主観」に属する領域ですから、敢えては今回、論及は致しません。話を「神戸出身」に戻せば、「知恵蔵」「朝日年鑑」「人事興信録」更には、朝日新聞社の社内データベースにも、「東京生まれ」と明記されたる客観的事実にも拘らず、編集担当者及び校閲担当者の何れもが確認を怠った、若しくは誤読した事実は、20年近き年月に亘って表現という現場に身を置いてきた小生にとって、初めての経験でした。紙面上で訂正を行なう際の文面を如何にすべきか、と先のメールでは御提案戴いておりますが、小生としては、冒頭で述べました様に、先ずは経緯の御説明を頂戴するのが順序では、と愚考致します。取り急ぎ。

9月21日（火）

夕刻、神宮前に本社を移転のダイヤモンド社。「週刊ダイヤモンド」坪井賢一編集長、I副編集長、M氏。大前@WORKでCS放送「ビジネス・ブレークスルー」。〝長兄〟宮崎学氏に御出演願い、日没する国の警察の退廃に関して忌憚無き見解を開陳戴き、大いに盛り上がる。

Y嬢よりメール。神戸近辺に住んでいた、と小生が以前にエッセイで述べていた記憶が評者には有り、更に、僕も神戸生まれだから、との浅田氏の発言から、誤った情報を推論した、との橋爪氏の弁明を紹介の後、神戸の地で学生時代を過ごしたが故に震災後の小生の活動に声援を密かに送った彼女自身にも、小生は

埼玉県川口市の峯徳学園理事長一族の不正疑惑を告発する学内の動きが

神戸出身との記憶が有り、神戸出身でない事の意味に思い至らず慚愧に堪えない、との。

9月22日（水）

メールを拝読しました。誤解無き様、改めて申し添えますが、小生は、紙面上での訂正の掲載を闇雲に求めている訳ではありません。人間、誰しも過ちを、時として犯すものだからです。加えて、貴女の小生に対する情念的感懐の表明を求めている訳でもありません。他方、過ちを犯さない為の「プロテクション」を如何に機能させるか、は私たち社会全体に課せられた問題でもありますが。小生が繰り返し御照会申し上げているのは、表現という現場に携わる筆者も貴女も何故、飽く迄も「記憶」でしかなかった事柄が事実か否か、を確認せぬ儘、活字とする判断を下したのか、という過程に関してなのです。「僕も神戸生まれ」なる浅田氏の発言は、聴衆に向けての「僕『も』」であり、小生に向けての「僕『も』」ではない事は、少なくとも日本語が判読可能な読み手であったなら、その回が神戸市内で行なわれた公開対談である事からも明らかな筈です。④何故、斯くなる誤読を碩学たる橋爪大三郎氏は犯したのか。②何故、「記憶」に頼って物した箇所に関して、改めての入稿前の確認を編集担当者に対して彼は依頼しなかったのか。③何故、編集担当者にとっても「記憶」でしかなかった箇所の改めての確認を貴女は行なわなかったのか。④何故、編集担当デスク、校閲担当者、編集校了責任者は、筆者にとっても担当編集者にとっても「記憶」でしかなかった箇所の改めての確認を行わなかったのか。以上の4点に関する経緯の御説明を賜りたく存じます。言わずもがなではありますが、筆者及び担当編集者が「記憶」に過ぎぬと、仮令、入稿時に申し出なくとも、氏名・年齢に代表される名称・数値等の客観的表現の正否確認を行なうのは、校正・校閲担当者に課せられた最低限の慎みではありましょう。小生と同じく、恐らくはリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーの歴史観に組みするであろう「朝日新聞社」が、「過去」や「事実」に目を瞑らない報道を心掛ける為の「プロテクション」を、編集・校閲段階で如何様に機能させているのか、その具体的事例として、今回の経緯を後学の為にも御教示戴ければ幸いです。先に小生は筆者を、碩学と評価しました。複数の編集者から漏れ伝えきく所に依れば、筆者は自身の氏名の表記、ルビの置き場所に至る迄、原稿引き渡し時に指定なさるとか。斯くも表現に精魂を込められる碩学から、又、小生が長年に亘って購読する新聞の学芸部から、新たに認定を受けた「神戸出身」なる記号を、或いは小生は今後、「知恵蔵」「朝日年鑑」「朝日新聞社データベース」を始めとする各種の人物録に於いても記載を求めるべきかと愚考しております。この点に関しても、評者及び学芸部責任者から御示唆戴ければ幸甚です。とまれ、紙面上での訂正掲載云々に関しては、経緯を御説明戴いた後の問題かと考えております。又、訂正掲載自体を要求若しくは希望する訳では必ずしもない事を、併せて、評者が忌み嫌うらしき「個人攻撃」のレヴェルで編集担当者の貴女のみを徒に責め立てている訳ではない事を、最後に改めて明記致します。

以上の文面のメールを午後に送信。夕刻、「朝日」読書面担当四ノ原恒憲編集長から、「読書面編集長からのお返事です」と題するメールを受信。曰く、評者から受け取った原稿は担当編集者が紙面に組み付けた後、読書面の編集部員、編集長、と内部での確認作業と、校閲部員による校閲作業を経るにも拘らず、「記憶」「思い込み」等が原因でチェック機能が作動しなかった事を深く反省し、今一度、原点に戻って基本的な確認作業を徹底させる、との。因みに、編集長はメールアドレスを社内で保有せぬ為、Y嬢のアドレスから発信、との断り書きが最後に。「週刊現代」の「新聞私評」を脱稿後、W嬢と西麻布のケンズ・ダイニング。芝浦のアース。祭日前なるも盛り上がりに欠ける。PG。

9月23日（木）

夕刻、W嬢と秋葉原のダイナミックスに、I氏の手にも負えぬ彼女のVAIOを持参するも、他社とは異なり販売店経由の修理を受け付けぬのがソニーの哲学、と知り困惑。ラオックス等を徘徊。オタクがいっぱーい、と叫声を上げるW嬢に、買う当てもないのに銀座で洋服を眺めるのと同じ行動心理が彼ら。貴女だってオタクでしょ、化粧品の、と諭す。明け方まで原稿。

9月24日（金）

脱稿後、帝国ホテルのオールドインペリアルバーで人妻J嬢。パークハイアット東京。ルームサーヴィスメニューに記載以外のワインを所望するべく、ジランドールのT支配人に電話。ピークラウンジA支配人と並んで「PG日記」愛読者として従業員間でも知られる氏に抜栓後、接続の吉原ソーブランド各店ホームページを回覧しながら、この娘は青学、立教、早稲田、法政、慶應、フェリス、と事情通から入手の〝噂の真相〟情報を伝授すると目を白黒。

毎回、わずか数秒の「寿命」とかの夫に不満を託つJ嬢も昂奮。PG。午睡の後、PG。以前は一回に一度が限度だった彼女も、一回に十

数度へと突如成長。アロマフレスカで食事の後、幼児の待つ自宅へと送る。

9月25日（土）

スパイシーヘブンなる新宿パークビル地階のインド料理店で昼食。原稿の後、夕食を一緒に摂る相手を捜すべく電話するも先約が、とことごとく振られ、以前から逢瀬を先方が望んでいた大学院生I嬢と深夜、南青山のバー・ラジオ2。その後は当然、かと思いきや、最初からなんて、と拒否される。三鷹まで素直に送り届け、寂しく独り寝。

9月26日（日）

休日出勤中のI氏の下を訪ね、一緒に外神田に位置するソニーVAIOセンターへ足を運ぶ。めでたく〝快復〟し、編集部で再インストール。

9月27日（月）

TBS。いつもと同じく零時二十分前に終了後、W嬢をピックアップ。西麻布に位置するbなるパーラウンジ。帰路、池尻に位置する築地すし好。閉店間際の店内には、仕事帰りと思しき風俗営業嬢を両脇に侍らして脂下がる男性客が幾組も。世直ししなくちゃ、と宮台真司チェンチェイの如き科白を盛んに繰り返していたW嬢、彼女らの会話を聞いて途中から、もおう、世も末ですね、と科白を変える。ま、団塊世代面した先方の男性客も当方を見て、同じ科白を吐いていたやも知れないが。

9月28日（火）

上野毛のアンクル・サムズ・サンドウィッチ。夜、W嬢と南青山に位置する栖み六。

9月29日（水）

里で昼食。深夜、一人でデニーズ尾山台店。同年代と思しき女性四人組が、シャトー・ペトリュスだのバタール・モンラッシェだのと高額銘醸葡萄酒の蘊蓄を語り合う隣席。摩訶不思議な日没する国。

9月30日（木）

10月3日付紙面で訂正を掲載したい、とのメールを前日に受信。以下の返信を打つ。

読書面編集長からのメール、拝受しました。従前から、お伝えしておりましたが、小生としては、改めての紙面上での訂正を特には求めません。（中略）最後に、これは余分な御節介かも知れませんが、メール件名に於ける「読書面編集長からのお返事です」との言い回しは、今後、同様の遣り取りが生じた際には、誤解を防ぐ上でもお使いにならない方が宜しいのでは、と愚考します。

縷々、申し述べましたが、お許し下さい。又、橋爪氏からも大変に御丁寧な書簡を受け取りました。お心遣い、恐縮しています。

10月1日（金）

高輪プリンスホテルさくらタワー。「サービスが伝説に変わるとき」の著書で知られるペッツィ・サンダース女史と対談。国際文化会館（IHJ）の図書室で「週刊SPA!」原稿。途中、コーヒーショップで「女性自身」から書籍に移動したかつての連載担当N氏。初担当した中村敦夫氏の最新刊を受け取る。

宇田川町のシノワ。ワイン愛好家向け雑誌「ヴィノテーク」有坂芙美子編集長と、ミレニアム・シャンパン対談。自宅に戻り、原稿続行。

10月2日（土）

元麻布のメランジュで髪の毛をカット。TBS。「オールスター感謝祭」。周囲の参加者の正解には寄与するも、自身は絶不調。

10月3日（日）

終日、自宅で原稿。

10月4日（月）

W嬢と恵比寿のフミーズ・グリル。ケンズ・ダイニングと似たフュージョン料理を供する。TBS。原稿。

10月5日（火）

IHJ。「NAVI」から「GQ」に河岸を移動して、浅田彰氏と対談。新潮社でI氏。六本木のアクシス。「一炊の夢」のイラストを担当の上田みゆき嬢の個展。毎週、遅筆の僕に愚痴一つこぼさず、辛抱強く脱稿を待つ編集S嬢の辛苦を労うべく恵比寿のドゥ・エトワールでフランス料理。

10月6日（水）

国際免許証を取得するべく、鮫洲運転免許試験場。南青山のエールフランスで航空券をピックアップ。自宅で夕刻まで原稿。W嬢とレンタカーで成田。21時55分発エールフランス273便。

なお、9月号にて記述の江東区森下に位置する料理店・平和園から、「自由党と創価学会のポスターが仲良く貼られた空間なる件に関して、店内に自由党並びに創価学会のポスター等は一切掲示していない旨、抗議を受けました。調査の結果、平和園が入居するビル自体には自由党のポスターの掲示が有るも、店内には自由党と創価学会のポスターは無い、と判明しました。創価大学卒業後に公明党から初当選し、新進党を経て現在は自由党に所属、同地域を地盤とする東祥三衆院議員の顔写真入りポスターの存在を以て早とちりした、「朝日新聞」学芸部及び橋爪大三郎氏をおよそ嗤えぬ、筆者の失態です。撤回・謝罪します。

〈次号つづく〉

田村電機の役員らがインド代理店SSEの手数料を横領し揉み消し工作